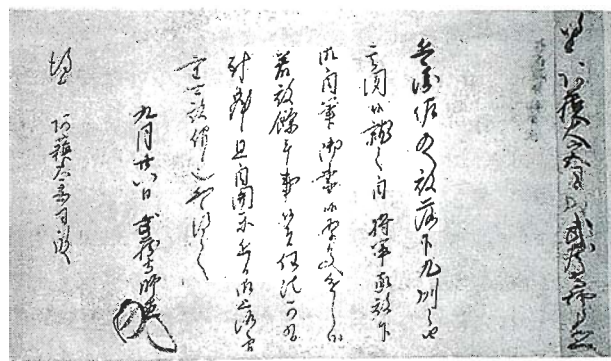
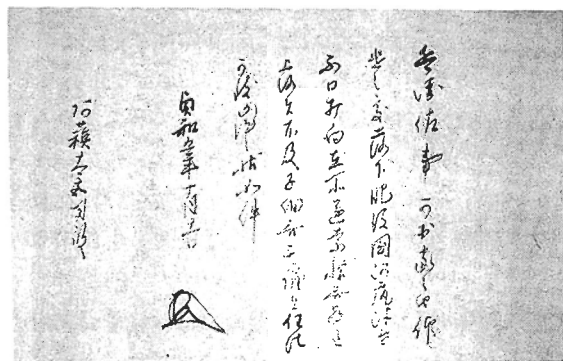


州の総官として置いた九州探題一色範氏を目の上のコブとしていたので、これを好機として直冬方につき、さらに肥前の深堀氏や松浦党、肥後の詫磨氏など続々とこれに加わった。こうして九州は、直冬の九州下向に先立って肥後に入った征西将軍宮（懐良親王）を戴

く菊池氏を中心とする官方、それに探題方、そして佐殿（直冬）方の三派てい立の独特の政治状況を迎え、その抗争の中からやがて征西府の覇権が確立されてゆく。（文学部教授 国史学）



〔三〕 將軍家 足利 尊氏 御判御教書
（直冬）
 兵衛佐事、可出家之由仰遣之處、
 落下肥後國河尻津云々、
 不日打向在所、遂素懐、無爲令上洛者、
 不及子細、無其儀者、
 任法可致沙汰之狀如件、
 貞和五年十月十一日 （羅氏）
（大） 惟時
 阿蘇太官司殿

〔二〕 高師直書狀
（折封ウハ書）
 〔謹上 阿蘇太官司殿 武藏守師直〕
（直冬）
 兵衛佐殿被落下九州之由、其聞候、就之、
（羅氏）
 自 將軍家被下御自筆御書候、案文進之候、
 若被餘手事候者、任法可有計沙汰候、
 且自關東近日御上洛之間、重可被仰候也、
 恐々謹言、
（貞和五年）
 九月廿八日 武藏守師直 （花押）
 謹上 阿蘇太官司殿
（宇治惟時）
（大）

世界—書物—図書館

井原 健

神は自然・人間・聖書という三冊の書物を書いた、ということになっていたりする。これはつまりこの世は何でもかんでも本なんだと言い切っていることになる。聖書ならまだしも自然や人間まで〈書物〉というメタファーで一括してしまうのは、一定の手順を踏んで読み解かれるという点では同じであると考えられていたからだ。それらを生み出すに当たって神が刻み込んでおいた書跡を苦勞して解読し、わかる者にしかわからない真理を導き出すという共通の作業。自然〔世界〕（マクロコスモス）も人間（ミクロコスモス）もすべて書物のように読まれ、理解される。今となつては多少奇異に思える一方で思わずこのたとえに惹かれて

しまうところもあるのは、それが過去何百年の間メタファーとして共有されていたという事実到现在のわれわれがもう取り戻すことのできないノスタルジックな喪失感を抱くからかも知れない。

歴史をさかのぼるとこういった考えはヨーロッパではかなり古くから存在する。特に世界＝書物という〈リーベル・ムンディ〉の観念は、ダンテ『神曲』中の「この宇宙に紙片のように散らばったものが愛によって一巻の書物に綴り合わされている」という言葉に代表されるように中世において一般的になり、「自然もしくは世界という書物を読むために、黄色くなった羊皮紙の埃を払った」ルネサンス以降も盛んに論じられる

ことになる。これまでダンテをはじめシェイクスピア、ゲーテ、ノヴァーリス、ジョイスなど数え切れないほどの人間がこういった〈世界という書物〉を夢見てきており、何かにつけて引き合いに出されるマラルメの「この世界のすべてのものは一冊の書物に帰着すべく存在している」という言葉も、世界そのものが解説されるべき一冊の〈大いなる書物〉であるというオルフィックなヴィジョンを反映している。劇場あるいは舞台にたとえられることもあるこの世界は一冊の書物として読んでいくこともできるのである。「世界はすべて、開かれた本である」(寺山修司)

この〈書物〉というメタファーを通して世界や人間を見る考えの背後には、この世のすべてを見尽くしたい、それを整然と分類して世界を一冊の書物に取り込みたい、そういうそれ自体で完結した巨大ジオラマを完成させたいという強烈な欲望が隠されている。たとえば現在ほとんどの図書館で採用されているデュエイの図書10進分類法(1876)も同じような夢に憑かれている。たかだか100年ほどの歴史しかもたないこのシステムは、10の〈類〉を同じく10の〈綱〉、〈目〉によってツリー状に枝分かれさせていき、最終的に1000の項目がこの世界全体を漏れなく覆い尽くすことを目指す。それはまさに一冊の書物の内部が〈章〉や〈節〉によって細分化されているのと全くパラレルであると考えていい。余りに膨大な知識を一箇所に閉じ込めるためにはそれ相当の精緻な分類システムが必要になる。図書館の歴史というのは、いかに効率のよい分類手順でこの世のすべてを細分化できるか、どれだけ遺漏なく綱の目を張り巡らせて世界を自らの中にまとめ込めるかの戦いの歴史でもある。

したがって図書館もまた、世界と人間について書かれた巨大な一冊の書物と見なせるだろう。〈書物の書物〉あるいはメタ書物。それはボルヘスが「砂の本」と呼ぶ怪物、つまりごく普通の装丁をしていながら異常なほど重く、無限に増殖するページには初めもなければ終わりもない、各ページにはまったくでたらめな数字が打ってあり、一度開いたページは二度と目にするることができないような究極の書物に他ならない。『薔薇の名前』に描かれていたような、薄暗くてちょっとカビ臭い地下室の、床が抜けるほど積み上げられ、テーマ別に整理されたあやしくいかがわしいタイトルの中から、誰もまだ手にしたことのない本のページをめくる、そしてそのページは図書館という名のメタ書物のどこかわからないある一部分に過ぎなくて、そこから先どこへ読み進んだらいいのか見当もつかない、下

手をするるとどこかで行き倒れになってしまうかも知れないというラビリンス、それが図書館である。こうして〈世界＝書物＝図書館〉は三題漸よろしくメタフォリカルに結合する。

そしてそういう図書館の中を歩き回ることによってのみ真に空想的・幻想的・想像的なものが生み出される。いわゆる空想とか幻想というのは往々にして非現実的・非実用的な気まぐれのように捉えられがちだが、むしろ図書館に眠るテキストとテキストの間から、記号と記号の間から生まれる、それ自体一つの現実と考えていい。それだけでは断片的な情報をいかに反復・解体・連結させ、そこからどんな想像を生み出すか、そこにこそわれわれ〈デミ・ウルゴス(創造者)〉の本領が発揮される。「夢見るためには、目をつぶるのではなく、読まなければならない」(フーコー)役に立たない知識の死蔵された単なる保管庫ではなく、次々に幻想という現実を生み出す想像力空間と考えてこそ、語の本来の意味において〈ファンタスティックな〉一冊の書物として図書館を語ることができる。図書館は、「開かれ、目録に整理され、ばらばらに切りはなされ、くり返され、結びつけられて」その度にファンタスマゴリックな空間へと変貌する。

ブラッドベリーの『華氏451度』に描かれたような焚書は図書館からその本来の機能を奪ってしまう。ボルヘスが「図書館は、その正確な中心が任意の六角形であり、その円周には到達し得ない一個の球体である」と定義しているのを見ればわかるように、それはある意味では神を抹殺してしまうに等しい。われわれにとりあえず必要なのは、気が遠くなるほど膨大なページを備えた〈世界＝書物＝図書館〉の中を全力疾走で駆け抜けていくことである。

(教養部講師 英語学)